永江朗の本のむこう側 142

音楽の開拓者たち。

NO MUSIC, NO LIFE.というのはタワーレコードのコーポレート・ボイスだけど、ほんとそうだよなと思う。ぼくの家の中では一日中ラジオが流れているし、電車に乗っているときもiPodかiPhoneで音楽を聴いている。蕎麦屋ですらジャズが流れる時代、BGMのない場所なんて「イノダコーヒ」ぐらいしかないんじゃないか。

しかし、いつでもどこでも音楽が聴けるようになったのはわりと最近のことだ。転機は1980年代だと思う。ウォークマンが普及して音楽を持ち歩けるようになった。しかも一人だけで、周囲の誰にも聞こえないように（音漏れはあるけれど）。それまで音楽はわざわざ聴くものだった。

いまでは流れる音楽のほとんどは洋楽で、それも主にアメリカやイギリスのものだが、もちろん昔からこうだったわけではない。西洋の音楽が入ってきて多くの人に受け入れられるまでには、いろんな人の苦労があった。

平岡養一もその一人。1907（明治40）年に生まれ、1981（昭和56）年に亡くなった。独学で木琴の演奏家となり、アメリカに渡ってラジオのレギュラー番組を持った。しかも日米開戦まで10年あまり、毎朝、生放送した。開戦後、日米交換船に乗って帰国。戦後は再度渡米し、最後まで日本とアメリカで演奏を続けた。

『木琴デイズ』はその平岡養一についての評伝である。著者の通崎睦美はエッセイ『天使突抜一丁目』などでも知られるマリンバ奏者。初のノンフィクションだが、音楽家の余芸などではない。膨大な資料に当たり、丹念な取材と考察を重ねた労作だ。

木琴というと、子供のおもちゃというイメージがあるかもしれない。しかし平岡のそれは本格的なもので、クラシックの難曲も演奏している（通崎は平岡の楽器を使ったCDも出している）。大正から昭和初期に青春時代をすごした平岡にとって、木琴は西洋音楽、近代音楽への入り口だった。

平岡は音楽の専門教育を受けることなく、独学で木琴の演奏法を身につける。自信満々で渡米するのだが、独学つまり我流であることで苦労もする。本書の第5章で通崎は、平岡が渡米前に録音したレコードを聴いて分析している。平岡音楽のすばらしい推進力は認めながらも、楽譜を正確に読んで演奏する力、つまり専門的なトレーニングを受けていないことによる欠点も見抜いている。プロの音楽家だからこその分析だ。

逆にいうと、独学でありながら、異国でレギュラー番組を獲得し、自分で自分を矯正しつつ一流の演奏家になっていった平岡の意志とエネルギーはすごい。経済的にも情報的にも現代とは比べものにならないほど貧しかった時代に、平岡が成し遂げたことはとても大きい。ぼくらの音楽的な環境も、もとはといえば平岡のような開拓者たちがいたからこそのものなのだ。いま平岡が生きていたら、iPodで何を聴いただろう。

『木琴デイズ』
通崎睦美
1,995円／講談社